

一、巨勢町の移り変わり

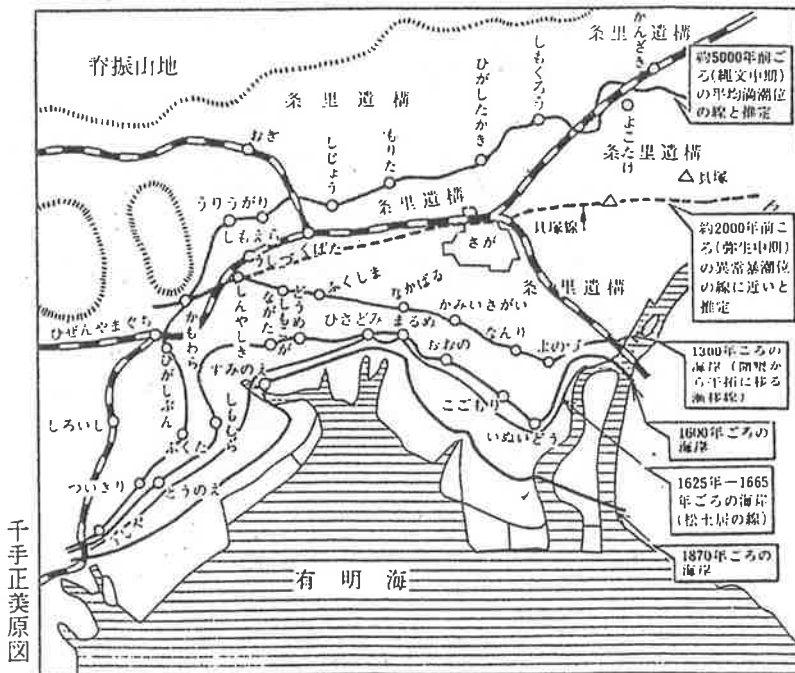
1、古代より奈良時代へ

私たちの巨勢に人々が住むようになったのは、今から凡そ2000年ほど前の弥生時代と推定されているが、それは、近くの兵庫町の牟田寄や千代田町の託田、姉などから弥生時代の貝塚や弥生土器が発見されているからである。

下図のように、当時、学校前の国道264号線付近まで有明海の海岸線であったと考えられている。いま、この地方に網の目のように広がっているクリークはその頃この地方にひろがっていた干潟に出来た（みおすじ）の跡といわれている。

弥生時代も中期以降、各地に出来た豪族の率いる小国家が次第に近畿地方の大和朝廷のもとに統一されていった。その大和朝廷の皇室を中心とした大和諸豪族の連合組織の一つに巨勢氏という豪族があって、巨勢・許世・許勢などと呼ばれ、その一族たちは、巨勢部として全国に広がったと考えられている。筑前・筑後などに巨勢・許勢などの地名があるが、当地の巨勢と同じく巨勢氏の一族の分布に関係すると推定される。

佐賀平野の開発進展図



千手正美原図

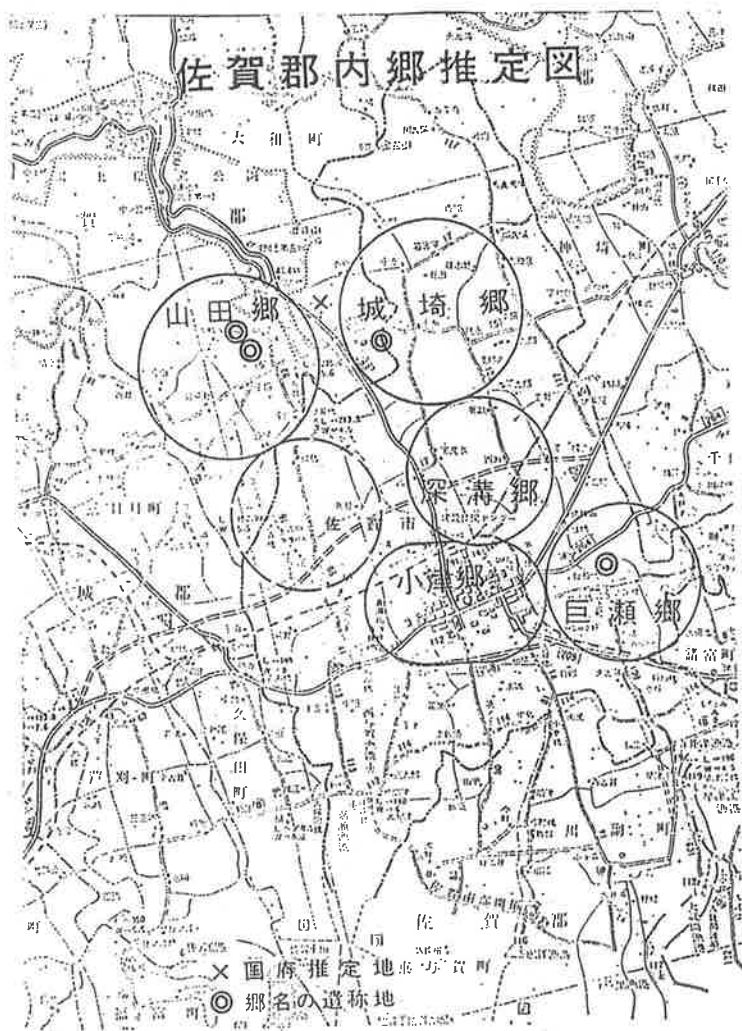
主な参考文献
「佐賀県地理参考図集解説」
森倉二郎

(注) 1. 佐賀市街東南の桑原は時代しりなお検討の余地があるようである
2. 進展図については本文の二参照
3. 縄文、弥生文化時代の時期については本文17頁の注②参照

奈良時代に作られた『^{ふどき}風土記』や、平安時代に編集された『^{わみやうしやう}和名抄』によると、佐賀郡の郷名として城崎・巨勢・深溝・山田・小津などの諸郷がみえる。これは、律令制における行政区画であり、巨勢郷という地名がとりあげられていることは、奈良時代以前、すでにこの地域がかなり発展していたと言えよう。

地図を見ると、当時の巨勢郷は、今の兵庫・巨勢と北川副、蓮池、旧佐賀市の一部を含む地域と推定される。

巨勢神社由緒記によると、大化白雉のころ（650年頃）巨勢大連なるものが^{おむらじ}^{いぎ}^{つしま} 杵岐・対馬に來寇した異族を鎮圧してこの地に留まり、荒野を開墾して巨勢の荘となすと書かれている。このことが史実としては、疑問があるかも知れないが、この土地の人々の間では、巨勢大連が巨勢郷開拓の祖として深く^{すうけい} 崇敬されてきた。



大化の改新や律令制によって天皇中心の国家体制ができあがり、それまで豪族の私有であった土地人民は公地公民となり、班田収授法はんてんしゅうじゆの実施により人々に区分田くぶんてんが与えられた。また、それが円滑に実施されるよう条里制ができ、碁盤ごばんの目のような耕地整理が施行されていった。条里の遺構いこうは、巨勢でも、西分付近に一、三、五、十七、三十五、三十六、等の坪名が残っている。高尾にも、三の坪、四の坪と呼ばれるところがある。

その後、公地制が一部崩れ、各地に荘園しょうえん（貴族・社寺などの私有地）がつくられていった。佐賀でも奈良時代から平安時代にかけてかなりの土地が荘園となった。神埼、本庄、川副などもその例である。

巨勢でも巨勢の荘として600町が院御領としての荘園になった。

巨勢の荘が後白河法皇の所領となったのはいつか明らかでないが、後白河法皇が、仙洞御所せんどうに造られた持仏堂ちぶつどうの長講堂ちやうこうどうの護持ごじのために寄進された荘園で長講堂領である。長講堂は今も京都市に残っているという。

建久2年（1191）10月、長講堂所領注文によれば、巨勢の荘は長講堂に対して

御簾 五間、 御座 六枚、 殿上料紫畳二枚、 持所垂布一段

御八講砂五両、 雑土装束一具、 御神祭神籬片具、 御更衣畳二枚

月充御殿油一石九斗五合、 門兵士三人、 移花十五枚

を負担した。となっているが、これらのものを納めることになっていたと考えられる。

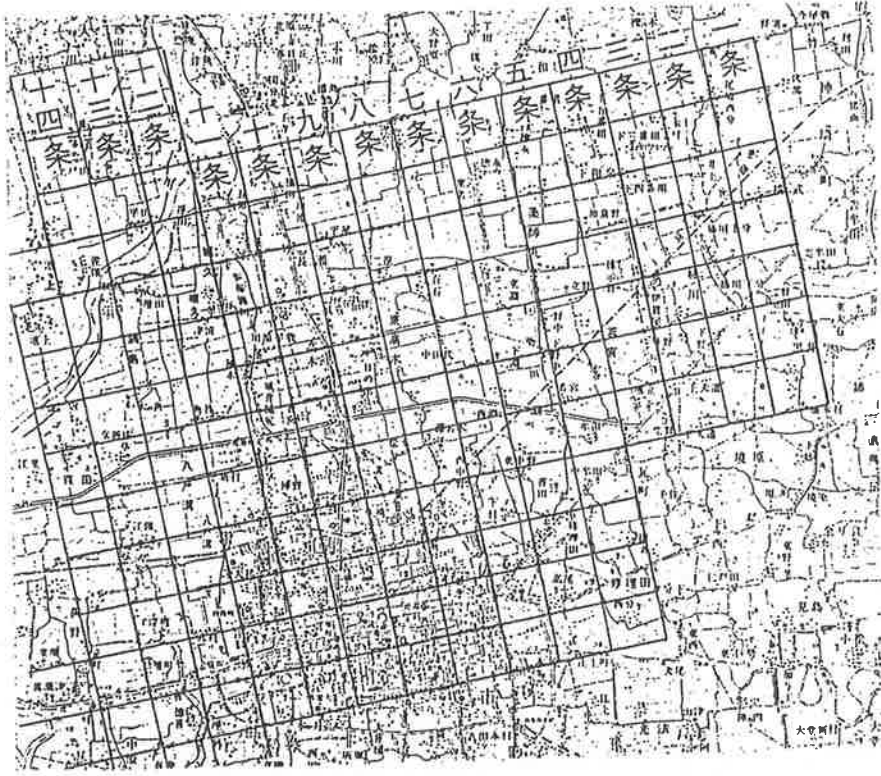
建久2年から100年後の正応5年の惣田数注文には、『巨勢の荘六百丁』とあって現在の巨勢町一帯と考えられている。

長講堂領は領主に変遷はあったが皇室関係の領地としてつづき、巨勢の荘も室町時代まで続いていたと言える。室町時代の応永14年（1407）の長講堂目録には、肥前の国巨勢の荘 年貢米二百石とあるが、年貢米二百石を納める定めであったと言えよう。

しかし、これらの実際の取り扱いについては史料がない。

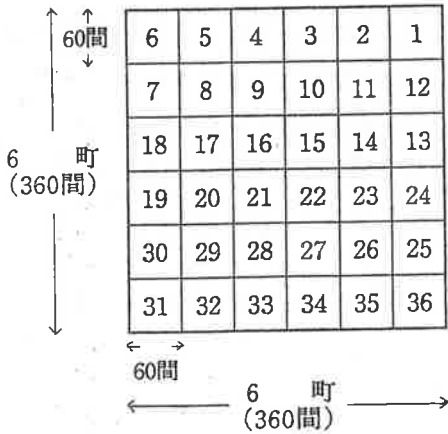
ただ、『実相院文書』や『河上宮古文書写し』によると、当時、巨勢の荘内には一町（あるいは三町）の河上社の仏性田があって、荘内の籠王院かもういんの院主需善なるひとが、その田地を知行経営して、年々一定の物を河上社に納めていたことがうかがえる。

佐賀郡の条里



「佐賀市史」より

1 里の坪割



佐賀平野の条里の坪割はこの形式である。



2. 鎌倉時代から戦国時代へ

平安時代の藤原氏による貴族政治も行き詰まり武士が起こり、平氏や源氏の世の中になっていったが、源頼朝が鎌倉幕府を開設したことで、武家政治は定着していった。

さらに源頼朝は全国に守護、地頭をおいて行政、警察、の実権を握り武士による封建政治体制を作っていた。

建久6年(1195)肥前小津郷龍造寺村の地頭に任ぜられた藤原季長は佐賀で勢力を振った龍造寺氏の祖である。佐賀北部の高木氏も地頭であった。

『巨勢神社由緒記』によると、建久5年(1194)ころ武蔵の児玉党の旗頭であった本荘太朗家長の子、参河守俊治というものが、巨勢、池田、宮田、真崎、牟田口、宮崎、千住、井原、松永、橋本、江副、公門、奥津、田所、近藤などの配下の武士を従えて、巨勢郷牟田に土着し故国の氏神の老松大明神を巨勢神社に勧請するとともに、阿僧法師を迎えて真言密教の円満院神通寺を開いたと伝えている。

延慶年中(1308—1310)、立川阿波守と言うものが、弟伊豆守、長男讃岐守、次男若狭守をつれて鎌倉今泉よりこの地にきて、巨勢川西岸に館を構えて今泉と称し、菩提寺の福泉庵を開いたと伝えているが、これらの武士たちが住んでいた所やその後の消息がわからない。

しかし、円満院は明治初年まで巨勢神社北側にあって牛島小学校として使用され後廃されたという。

また、先にあげた武士の名字をつぐ人が巨勢、兵庫に多く残っていることなどを考えると史実に近い感がする。

鎌倉幕府が崩壊し世の中は乱れ、後、足利氏によって室町幕府が開かれ全国統一の姿はできたものの応仁の乱が起こり国は乱れ、幕府の権威は地に落ち世の中は乱れに乱れ戦国時代となっていた。

当時、巨勢の周辺には、龍造寺、鍋島、高木、八戸、小田、神代、江上、綾部などの武将がかまえて争っていて、戦乱が絶えなかったと言えよう。

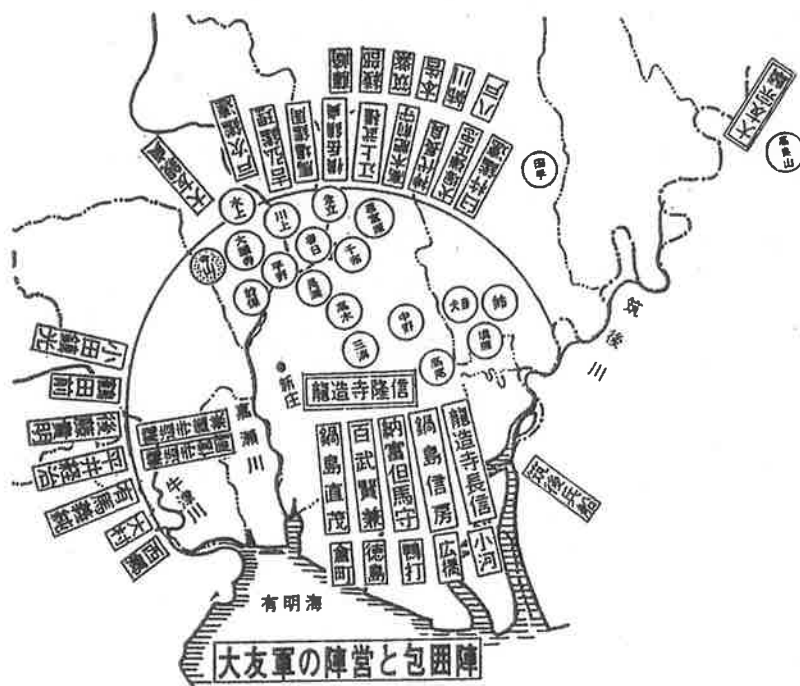
当時、巨勢の東蓮池には小田氏は天然の要崖によって小曲城を築き大きな勢力をもち、西には龍造寺氏が勢力を延ばしていた。

大分の大友宗麟が九州に強大な勢力をもち肥前にも拡げてきたが、龍造寺氏は応じなかったので、永禄12年（1569）大友宗麟は佐賀東部の武将を味方にして大軍を率いて久留米の高良山に陣取り、配下の戸次、臼杵の軍は佐賀城を落とさんと千代田の姉、境原まで押し寄せたが勝敗はつかず一時和議がなったが、元亀元年（1570）大友勢は、戸次監連、臼杵式部を武将として東巨勢、高尾口に攻め寄せた龍造寺勢はこれを退け、両軍の対峙はつづいた。

そこで、その年八月大友氏は大友八郎親貞を大将として六万の軍を差し向け佐賀を包囲し、大友八郎は川上の今山に陣をしいた。龍造寺勢は五千の兵をもって迎えた。佐賀平野は大友勢で埋まり今や佐賀城は風前の灯ともみえた。そこで鍋島直茂たちは龍造寺氏の運命をかけて、敵の虚をつき今山の本陣に夜襲をかけたので、不意をつかれた親貞の本陣は混乱のうちに壊滅し、大将親貞も討たれてしまった。

さらに東部にいた大友勢にたいし龍造寺隆信、鍋島直茂などは、巨勢神社に祈願して出陣し高尾口で戦いこれを敗走させたという。

道崎の戸次塚はそのとき討ち死にした敵将の墓と伝えられている。



「佐賀市史」より

3、江戸時代

群勇割拠して乱れていた戦国時代も織田、豊臣によって全国統一がなされ戦乱も始まり、さらに徳川氏が実権を握り江戸に幕府を設立し統一が完成した。

佐賀でも領主が龍造寺より鍋島にかわり安定していった。

江戸時代に作られた『郷村明細帳』によると、古瀬郷を次のように示している。

古瀬郷

- | | |
|---------|------------------------|
| 一、牛島村 | 高田、 庄屋小路、 新村、 寺小路 |
| 一、今泉 | 陰村、 芦原、 江湖端、 高尾西宿 |
| 一、宿 | 竈王院小路、 南小路、 北小路、 井手小路 |
| 一、修理田 | |
| 一、平尾 | 南小路、 北小路 |
| 一、高平西分 | 南小路、 五の坪、 藤田小路 |
| 一、高平東分 | 角町、 新村、 柳原、 東島、 西中太町 |
| 一、内記殿私領 | 千住 |
| 一、 同 | 牟田寄 |
| 一、 同 | 仲牟田 |
| 一、 同 | 瓦町、 南小路、 中小路、 久富、 三ッ升 |
| 一、 同 | 野中村、 傍示、 草原、 立野、 下野中 |
| 一、 同 | 若宮村、 六丁野 |
| 一、山城殿私領 | 中野吉村 |
| 一、 同 | 伊萱村 |
| 一、 同 | 外野村 |
| 一、 同 | 柴野村 |
| 一、 同 | 堀立村 |
| 一、 同 | 稗蒔村 |
| 一、内記殿私領 | 傍示村 |
| 一、蓮池私領 | |
| 一、蓮池本町、 | 一、蓮池魚町 一、蓮池城原町 一、蓮池神埼町 |
| 一、東西村 | 寺町、 東古瀬 |

これで見ると、現在の巨勢の地域は蓮池藩の東西村を除き佐賀本藩の直属地となっていて、兵庫に属する所は鍋島山城物守殿と鍋島内記殿という家老の私領となっていた。そこで高尾には佐賀藩の上納米を納める倉庫があり、上納米を検査したり倉庫に納めたりしていたという。

高尾橋の所にはお倉の倉番がおかれ、米仲仕の取り締まりも行われ、また、この付近は『お倉浜』といわれ港の役目もし、『津出し』『浜出し』といって高尾より米の積み出しも行われたが、山城守殿の倉庫は芦原（今のし尿処理場付近）に並んでいたという。

一方藩政時代の佐賀郡の行政をみると

佐賀郡は次の郷よりなり石高102,779石であった。

1、上佐賀代官所所轄（代官所 春日村駄市河原）

① 上佐賀郷 ② 巨勢郷 ③ 新庄郷 ④ 中佐賀郷 ⑤ 嘉瀬郷

2、川副代官所所轄（代官所 新北村 三重）

① 川副上郷 ② 川副下郷 ③ 川副東郷 ④ 与賀上郷 ⑤ 与賀下郷

代官所の役人は次のとおりであった。

① 代官 ② 助役 ③ 手先（手徒） ④ 下役（足軽）

そして巨勢村の所属の内わけは

佐賀藩の直属地…高尾・修理田・高平西分・牛島（内芦原の一部を除く）

蓮池藩の所領地…東西（石高500石）

藩政時代巨勢町の村方行政及び世話役は次のとおりであった。

村名	庄屋	村役	差使
高尾	1名	1名	1名
修理田本村	1名	1名	1名
高平東分	1名	1名	1名
高平西分	1名	1名	1名
東西	1名	1名	1名
牛島	1名	1名	1名

このほか次の会計担任があった。

高尾 治佐衛門 (東島)

谷山 兵蔵 (牛島宿)

上納米は田一反歩に対し米3俵半より5俵まで上納していたが、凶作のときは検見
といて検査方実施に臨み坪試しの上処理し(穂枯れの時や洪水のとき)10分の2ぐ
らいを減額したという。

また、凶作のときのため次の場所に郷蔵設置し糶にて貯蔵していたという。

村名	場	所	設立者
高尾	204番地	真崎庄蔵 南	代官所
高平東分	283番地	柳原 井田惣吉 前	小村
高平西分	657番地	中村広次 東	小村
修理田本村	1095番地	持永次平 前	小村
牛島	431番地	真崎仁作 東	小村
高尾	225番地		小村
東西			小村

秋になれば、農家は上納米製作のため夜業をして上納の義務を果たしたし、9月皆
納者には代官所より農具を賞与し、酒肴をだし、もし農家で怠る者があれば下役が巡
視して訓戒し、春になって未耕地があれば本人に厳命があったという。

土木工事は竹木を代官所より配布して河川のしゅんせつ工事は農家より出夫し、巨
勢川、佐賀江のしゅんせつや芦切りは各村から出て実施した。

また、大洪水の時は尾の島放水路西方を切り害を去り、大旱魃かんぼつの時は巨勢川に堰を
作り巨勢川以東の巨勢郷に水を引いたという。

一方、教育については、寺、または、自分の家で教育する程度で、巨勢での寺小屋
は次の二つであった。

御庵寺子屋	高尾小路	満安 三左衛門
		大隅 久左衛門
東西私塾	東西	田原 磐門

4、明治以後

◎ 維新後の藩・県の移り変わり 次々とめまぐるしく変化していった

明治元年より明治4年7月13日まで	佐賀藩
明治4年7月14日より明治4年9月3日まで	佐賀県
明治4年9月4日より明治5年5月28日まで	伊万里県
明治5年5月29日より明治9年4月17日まで	佐賀県
明治9年4月18日より明治9年8月20日まで	三潞県
明治9年8月21日より明治16年5月8日まで	長崎県
明治16年5月9日より以降	三潞県

◎ 当時の村政は明確でないが明治8・9年ごろについていうと

第十大区六小区 修理田・高平・高尾・東西に蓮池・藤の木・湊・若宮・瓦町がはいり修理田の元忠寺が取扱所であった。のち、六反田に移されさらに高尾（高尾139番地・倉庫の東側）に移った。

牛島は第一大区一小区で大財・神野・木原・本庄・茅布施などと取扱所は松原におかれた。

このように庄屋が廃止されて大区に区長・小区は戸長制にかわっていった。

明治11年大・小区制は廃止され各町村ごとに戸長を任命して戸長役場を設置した。高尾・修理田・東西で一戸長役場を形成し、牛島は神野と一戸長役場をなしていた。明治19年神野と蓮池が分離したので高尾村・修理田村・牛島村の4村の戸長役場となった。戸長役場は戸長宅におかれた。

◎ 戸長役場時代の巨勢村は次の四大区よりなる。

1、高尾 2、修理田 3、東西 4、牛島

それぞれの小字は次のとおりである。

一、高尾

1、高尾宿 2、南小路 3、北小路 4、井手小路 5、竈王院小路

二、修理田

1、東分区 ① 柳原 ② 東島 ③ 一里塚 ④ 仲駄町 ⑤ 道崎

⑥ 権現堂

2、西分区 ① 東小路 ② 西小路 ③ 中小路 ④ 南小路

3、本村区 ① 平尾道崎 ② 平尾 ③ 中島 ④ 修理田本村
⑤ 川端

三、東西 ① 寺町 ② 東西本村 ③ 犬尾橋 ④ 東巨勢

四、牛島 ① 上新村 ② 下新村 ③ 牛島宿

◎ 古瀬村誕生

明治22年4月1日に町村制実施となり『古瀬村』が誕生し、藤瀬長年氏が初代村長として選ばれた。

町村制実施につき次の機関を置いた。

村長 助役 収入役 書記 使丁 村会議員 区長 区長代理

区画は次のとおり

- A、大字牛島 牛島上(上新村) 牛島西(構口)
牛島下(下新村、牛島宿)
- B、大字高尾 高尾宿 高尾小路
- C、大字修理田 修理田(修理田、中島) 平尾(平尾、道崎)
西分(高平) 東分上(東島、仲田町、柳原、一里塚、道崎の一部)
東分下(権現堂)
- D、大字東西 東西 犬尾橋 寺町 東巨勢

◎ 巨勢村に変わる

古瀬村では意味がないということで、明治29年に巨勢村に変更した。明治29年、高尾にあった旧佐賀藩の倉庫を払下げてもらい役場として使用した。

◎ 教育については明治5年の学制公布を受け学校を設立した。

- ・明治8年 牛島小学校設立 高尾、牛島は牛島一本松4番地に(巨勢神社北側)牛島小学校をたて明治10年ごろまでに教育した。
- ・明治11年 高尾小学校設立 牛島小学校を廃し高尾、牛島、修理田で高尾三本松204番地(代官所糶倉跡)に高尾小学校を設立した。
- ・明治13年 東西小学校、修理田小学校設立。修理田村は三本松823番地(道崎)に修理田小学校を建て、東西村は東西334番地に東西小学校を建てた。
- ・明治17年 東西小学校を廃止、修理田小学校に合併した。
- ・明治22年 修理田小学校を廃止し、高尾小学校に合併した。
- ・明治24年 現在地に土地を購入し二階建ての校舎を建設して移転した。

- ・ 明治34年 高等科を併置し高尾尋常高等小学校となった。
- ・ 明治35年 巨勢尋常高等小学校となった。

◎ その後の主な変遷をあげると

- ・ 明治42年 校舎増築
- ・ 大正4年 校舎増築
- ・ 昭和3年 講堂と校舎増築
- ・ 昭和16年 巨勢村立巨勢国民学校と改称
- ・ 昭和22年 巨勢村立巨勢小学校と改称
- ・ 昭和22年 小学校敷地に巨勢村立巨勢中学校開設
- ・ 昭和29年 佐賀市立巨勢小学校と改称
- ・ 昭和29年 佐賀市立巨勢中学校と改称
- ・ 昭和32年 巨勢中学校を廃止、城東中学校に統合
- ・ 昭和48年 体育館建設
- ・ 昭和50年 巨勢小学校創立百周年式典を行う
- ・ 昭和54年 校舎を改築
- ・ 昭和59年 管理棟建設



巨勢公民館

巨勢小学校



巨勢町の産業は明治、大正、昭和30年頃まで農業中心の町であったが、それまで佐賀農業を特徴づけたクリーク農法、つまり踏み車による揚水、漏水防止のための床締作業（三種類の犁をつかいこなして漏水をふせぐ技術を要する複雑入念な馬耕作業）早、晩の二段におこなう稲作体系、年雇い労働力を基にした農業生産の在り方は大正末期から大きく転換した。まず、機械灌漑の最初の試みは、揚水にもっとも難渋していた東分下で大正8年に行われた。5馬力のディーゼルエンジンをすえ約50ヘクタールに実施したが、不調に終わった。それで、小型発動機による舟型揚水機が開発されこれは真崎鉄工所が担当した。これも実用化が難しく、試行錯誤のすえ真崎鉄工所で2馬力のモーターによる電力揚水機が開発され農家の決断と努力で機械灌漑が実施されていった。揚水に使う労力が少なくなったのを利用して螟虫の害を減らすため、田植を一度ですますようになった。こうして苦しい踏み車の労働から農民は解放され、藩政時代からつづけられた早、晩の二回作が一回作に代わり、田植を一回に統一したことで被害に苦しんだ三化螟虫が平坦部から影を潜めた。しかし田植が一回になったので、田植労働不足となり筑後地方から田植さんを雇うようになった。

戦後、犁鋤農業から耕耘機、トラクターとかわり、田植も人手から田植機械へと進んでいった。

◎ 昭和初期の農家戸数

年度	本 業				副 業				合計
	自作	自小作	小作	計	自作	自小作	小作	計	
元	30	82	28	140	18	5	10	33	172
7	49	78	16	143	11	18	9	38	181

この表で見ると当時の全戸数382戸にたいして農家は181と約半数くらいでその80%は専業農家で純農村だったといえる。

次の職業調査を見ると農業従事者が半数近く給料生活者が現在とくらべると少ないことが分かる。

◎ 昭和初期の職業概況 昭和8年

農 業	農 業	182	工 業	瓦 製 造	1
商 業	会 社	2	勞 働	塗 り 物 業	1
	穀 物 商 業	6		裁 縫 業	1
	飲 食 業	3		豆 腐 製 造	1
	料 理 屋	4		そ の 他	19
	菓 子 製 造 業	3		計	46
	雜 貨 商 業	9		工 場 勞 働	44
	小 売 業	7		雇 用 業	12
	小 店 業	7		賃 業	19
	菜 種 子 業	1		計	75
	自 転 車 業	2		そ の 他	雜 業
酒 販 売	6	官 吏 軍 人 等	16		
そ の 他	13	無 職	15		
計	63	理 髮 師	2		
工 業	工 場	5	医 僧		3
工 業	大 工	11	僧 侶	4	
	精 米 業	5	計	45	
	製 麵 業	2	總 合 計	411	

町区別戸数と人口 昭和8年度

町 区 名	戸 数	人 口	町 区 名	戸 数	人 口
構 口	29	121	平 尾 道 崎	24	151
上 新 村	26	229	高 平	30	196
下 新 村	14	79	東 分 上	19	100
牛 島	38	142	東 分 下	22	164
高 尾 宿	39	124	東 西	38	199
高 尾 小 路	32	105	東 巨 勢	23	125
修 理 田	40	131	計	374	1,866

平成元年4月1日現在の町区別人口

町区名	戸数	人口	町区名	戸数	人口
構口	81	249	平尾	35	139
牛島上	325	1120	東分上	45	169
牛島下	115	378	東分下	28	154
牛島宿	81	241	道崎団地	44	117
高尾宿	104	324	西分	34	167
高尾小路	49	192	東西	42	194
高尾団地	191	689	東巨勢	23	114
修理田	101	362	計	1,298	4,609

巨勢地区も戦後次第に変わり、特に昭和29年佐賀市と合併、巨勢村から佐賀市巨勢町となり、町内も住宅が増え、道崎団地、高尾団地などができて、町区も15町区となり、とくに巨勢川西は市街化区域となり、都市化して人口も急増してきている。



牛島下県営アパート

高尾団地

